

ニュータウンにおける開発以前の痕跡の抽出と実態の分析
東急田園都市線沿線元石川地区を対象として

1563224 山岸 匠

指導教員 高見沢実教授 野原卓准教授

1. 研究の概要

1.1 背景

日本では1960~70年代に多くのニュータウン（住宅地に加え、商業・業務、文化・教育などの機能を備えた一定規模以上の新市街地をさす）が開発された。これらは計画的な開発によって「良好な住環境の形成」を実現した一方で、土地や歴史による蓄積を持たない「均一的・画一的」な都市であると認識されることもある。そうしたニュータウンにも開発以前の歴史は存在し、その一部は現在の都市に何らかの形で残存している。こうした「痕跡（時代の移り変わりによる都市の様相の変化を経てもなお、歴史的な結びつきを覚悟することが出来る空間）」はニュータウンに歴史・文化・経験的なイメージを生み出す要素になると言える。今回の研究対象であるニュータウンでは区画整理事業によって都市の様相の大きな変化があったと言えるため、開発前後の結びつきに着目する。

1.2 目的

本研究の目的はニュータウンにおける痕跡の抽出と、それらの分布より得られる痕跡の集中・連続性の実態を明らかにすることである。

1.3 研究方法

まず、プレ調査（現地調査、新旧の地図・地域資料¹の分析）により対象地における痕跡となり得るものを抽出及び分類し、痕跡の抽出条件を設定する。これに基づいた対象地域における痕跡の抽出を行い、分布を示す。次に分布より痕跡の集中・連続性が見られるエリアを特定し、地域資料より把握される歴史的な文脈を参考にそれらが持つ構造を明らかにする。

2. 対象地区について

開発によってその様相を大きく変えたニュータウンとして、1960年代後半から鉄道延伸に伴う大規模な区画整理事業が行われた元石川地区（現あざみ野・美しが丘）を対象地とする（図1）



図1：対象地区の位置

3. 開発以前の痕跡の抽出

対象地区のプレ調査を行ない痕跡となり得るものを抽出及び分類したところその形態は、神社や祠、家屋などの建造物を示す「点型痕跡」、開発以前の旧道など道路に関する「線型痕跡」、開発前住民の土地の影響を受けた不整形・不均質な街区や大規模な緑地などの「領域的痕跡」、地形の影響を覚悟できる都市デザインである「地形継承型痕跡」の4種に分類できた。さらに、それぞれに含まれる計12種の痕跡要素及びその抽出条件を定めた（表1）。また、地形継承型痕跡は対象地区において発見された、小川跡の緑道・丘陵に沿った曲線街区・谷間の立体交差・窪地の活用の4種類の空間を痕跡として抽出した。これら抽出条件をもとに対象地域における痕跡をリストアップし地図へのプロットを行った。（図2）

表1：痕跡の分類と抽出条件及び抽出結果

種別	条件	主な資料	凡例	数量
点	神社・寺	開発以前からの存在を確認できること	国土基本地図・地域資料	❶ 6
	祠・石板等	開発以前からの存在を確認できること	地域資料・現地調査	❷ 10
	開発前建造物	開発以前からの姿が現在に保たれていることが確認できるもの。	国土基本地図 住宅地図・地域資料	❸ 6
	大敷地保持家屋	建築面積に対して2倍以上の庭・屋敷林・農地等を持つ家屋	住宅地図・空中写真	❹ 55
	開発以前からの社会的施設	開発以前から成立していたもの（建て替えられたものも含む）	国土基本地図 地域資料	❺ 3
	その他の痕跡物	開発以前からの存在を確認できること	地域資料	❻ 3
線	街道・主要道	開発以前の地図と一致し、開発以前は主要な道として使われていたこと	国土基本地図 国土基盤地図・地域資料	❼ 4
	旧道・4m未満の道路	開発以前の地図と一致するもの、もしくは幅員が4mに満たないもの	国土基本地図 国土基盤地図	❽ 8
	迂曲道路	交差点間に2カ所以上の変曲点を持つもの（折れ曲がり含まない）	国土基盤地図	❾ 4
領域	不整形かつ不均質な街区	街区形状が不整形かつ隣り合う建築に傾きがある“かつ”建物立地や面積に大きなバラつきがある（マンション等は含まない）	住宅地図 国土基盤地図	❿ 52
	緑地・農地	①生産緑地地区・特別緑地保全地区の指定があるもの、もしくは、②大きなまとまりでの緑地・農地が確認できるもの	横浜市まちづくり地図情報 空中写真	①:20 ②:34
地形	地形の影響を覚悟できる都市デザイン [小川跡の緑道・丘陵に沿った曲線街区・谷間の立体交差・窪地の活用] の4種	国土基本地図 横浜市盛り土地図	⓫ 10	

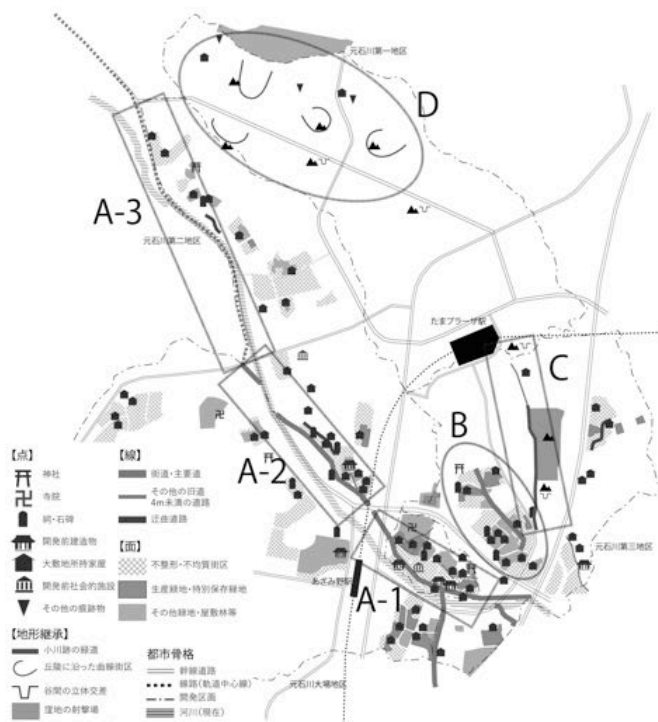


図 2：抽出された痕跡の分布

4. 痕跡の集中・連続性の実態

抽出した痕跡のプロットにより、対象地区には痕跡が集中または線状に連続するエリアが存在することが分かった。これらを A：旧街道を中心とした連続、B：尾根先の集中、C：古集落をもたない谷戸、D：丘陵地の曲線街区の集中、の 4 つのエリアとして選定した。これらのエリアを、地域資料をもとに把握される歴史的文脈を参考に、集中・連続性を生み出す構造の実態を把握する。

A は谷戸を流れる川に沿った街道を中心として発達した集落の痕跡が連続したものである。全体的な連続性としては村内に存在する 8 つの神社と合同例祭による旧街道の利用が挙げられる。元石川地区には谷戸に沿って 8 か所の神社があり、谷戸宮と呼ばれていた（対象地区内にはうち 4 社）。年に 1 度の合同例祭では各社が対象地区南東の驚神社へ向けて神輿やお囃子の行列を組み、旧街道を道いっばいに広がりながら行進する。さらに主に痕跡の重なり合いの性質から 3 つに分けられる。A-1 では旧街道沿いに寺社などの影響力の強い痕跡が並び、開発以前は教育・文化・商業の中心であったという歴史的背景から開発区画の対象外であり、多くの痕跡が集中して残存している。A-2 は旧街道と寺社がそれぞれ離れて残存しており、沿道にある明治期の神道系新興宗教の拠点とその周辺に痕跡の集中が見られた。

A-3 は旧道が都市計画道路と一体化しており、沿道

に痕跡の集中・連続は見られず、神社や農地・屋敷林などが分散している。

B は村内では最も肥沃な土地であり、多くの住民が住んでいたとされる場所である。現在は神社へと登る旧道（地蔵坂）を中心に広い敷地を持つ農地、屋敷などが集中している。その一方で、開発以前の小宅地保有者の土地が集まってできたと思われる小規模区画の密集した街区も複数見られる。

C は旧道や集落の痕跡はほぼ見られないが、小川跡の緑道や谷間の立体交差、窪地を利用した射撃場の跡などの地形継承型の痕跡の連続が見られる。

D は丘陵に沿った曲線街区のデザインが多用されたエリアである。昭和初期に黒部幹線の送電線のために建設された鉄塔の存在などによって開発当初の碁盤の目状のプランが不可能になり、再検討の結果、地形に即したクルドサック方式の区画プランを行うことになったことが開発の資料から明らかになった。

5. 結論

ニュータウンにおける開発以前の痕跡を抽出した結果、形態による 4 つの分類と、それぞれに含まれる計 12 種の痕跡とその抽出条件を定めた。

本研究の対象地区のうち、痕跡の集中と連続性が発生している箇所はどれも地形とそれに影響を受ける旧道・神社・地形継承型の痕跡を中心とする構造の骨格が形成されていた。さらに神社・商店などにより文化・経済的中心性が強化されてきた箇所にはより多くの痕跡の集中と連続が見られた。これにより痕跡の集中・連続性を持つ箇所は土地や歴史による蓄積を持つエリアであると言える。

主な参考文献等

1. 田中一成(1996)「都市空間における記憶的イメージの抽出と空間指標変化の関係」都市計画論文集 31 巻 p. 169-174.
2. 菊山幸輝・大山勲(2007)「歴史の重層した密集市街地における細街路景観の特徴の抽出」都市計画論文集 42.3 巻 p. 85-90.
3. 横溝潔(1995)「山内のあゆみ」音羽書房.
4. 東急急行電鉄株式会社田園都市開発事業部編(1988)「多摩田園都市 開発 35 年の記憶」東京急行電鉄.
5. 井上早太(1993)「見つめて 30 年多摩田園都市」井上早太
6. 山内小学校百年の歩み誌発行委員会編(1982)「山内小学校百年の歩み誌」山内小学校百年の歩み誌発行委員会.
7. 横浜市立新石川小学校編(2017)「わたしたちのまち新石川創立 30 周年記念」横浜市立新石川小学校.
8. 間宮士信他編(1999)「新編武蔵国風土記稿荏原郡 4 巻」文芸出版.

ⁱ[地図] 国土基本地図(1962・1970) ゼンリン住宅地図(1969・1984・2005・2018) 国土基盤地図(2014) 空中写真(1947 米軍撮影・1975 国土地理院・2009 年国土地理院) [地域資料] 参考資料 3,4,5,6,7,8